

怒江大峡谷の少数民族と生活文化

— 中国雲南紀行（2） —

板垣俊一

昨夏（2004年8月）、中国の雲南省に少数民族を訪ねる2度目の旅行をする機会に恵まれた。雲南の辺境を旅しながら風土と生活文化との密接な関連について深い印象を得たので、以下私が見聞したことを写真を添えて報告してみたい。

今回は、雲南大学と怒江州人民政府の主催による「怒江大峡谷民族文化および第三回中日民俗文化国際学術シンポジウム」への参加が主な目的だった。シンポジウムは、8月18日から8月20日まで3日間にわたって怒江リ族自治州の州府となっている六庫という都市で行なわれた。この地でこうした国際シンポジウムが行なわれるのは初めてのこととあって、州政府の力の入れようは大変なものであった。例えば事故のないよう移動には常に公安警察の警備が付き、医師が同行し、毎晩歓迎の歌舞ショーがあるなど、参加した我々はほとんど国賓並みの待遇を受けてきた。

六庫は人口6万人程度で、怒江流域の川幅が数百メートルしかない狭い山間の片側に開けた細長い都市である。

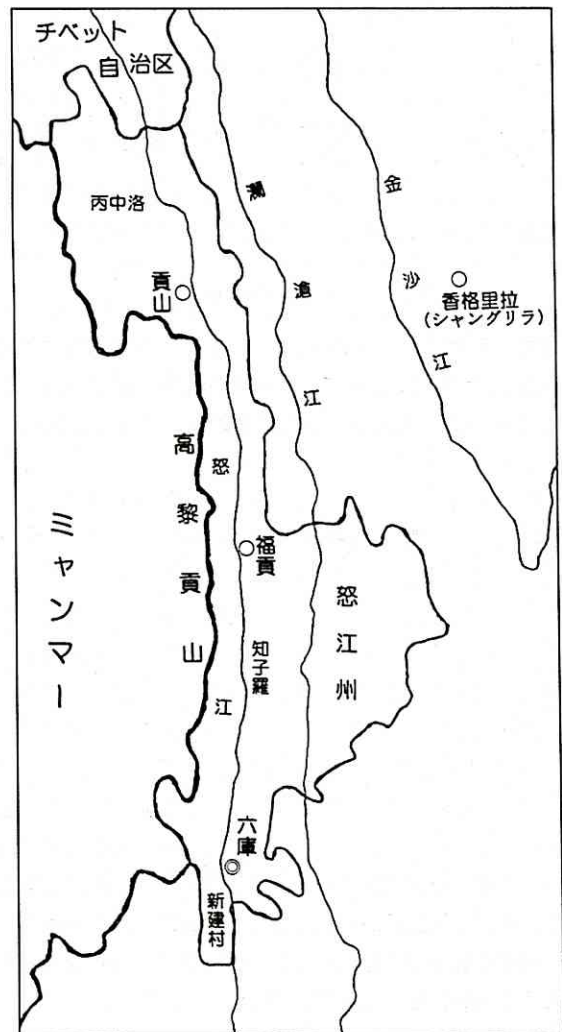


写真① 六庫の町の大通り

[リス族]

シンポジウムは少数民族の文化が中心だったが、とりわけ注目されたのは現地に住む少数民族出身の研究者の発表だった。怒江の大峡谷には、極めて厳しい自然条件の中に、比較的優勢なリス族をはじめ、おもな民族としては怒（ヌー）族、独竜（トールン）族などが居住していて、それぞれ独特の風俗習慣・伝承文芸・舞踏・音楽などを持っている。

民族の差異はまず言語にあるわけだが、これらの民族は近接民族も含めていずれもチベットビルマ語族に属する点では



いたがき しゅんいち

〒951-8155 新潟市関屋堀割町1-2（自宅）

むしろ共通性がある。ただし言語的により細かく言えば、リス族が雲南に広く分布するイ族・白族の言語であるイ語系に属し、怒族と独竜族はそれに属しないとされている点では多少の差もある。その他、外見上民族を区別する指標としては民族衣裳があるが、これも日常ではほとんど着ていないから区別がつかない。また、同族であっても支族や住む地域によって民族衣裳にも少しずつ差異がある。結局、詳しいことが分からない外部の一般人にとっては、あなたは何族ですかと直接聞いて確認するしか術がない。

当地での配付資料（シンポジウムの手冊）によれば、怒江リス族自治州の少数民族人口は約45万7千人。また1999年の統計（参考文献A1999.）によれば、リス族は23万人、怒族は2万7千人、独竜族に至っては5千人となっている。これによって各民族の人口規模がだいたい分かるだろう。



写真② 六庫で開かれた服飾モデル・コンテストの舞台
（雲南西北部各民族の伝統的衣裳に新たなデザインをこらした衣裳をモデルたちが披露していた）

さて、シンポジウムでの発表の1例、リス族出身の研究者が自民族について述べた内容の一端を紹介すると次のようなものであった。（史富相「リス族的氏族起源和図騰崇拜初探」…参考文献B 2004.）

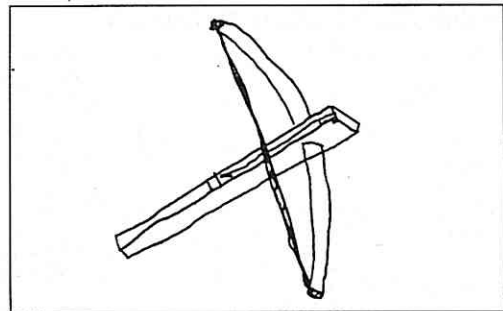
リス族は周辺の文字を持たない民族と違って文字をもつ民族だが、リス文字と言われるものは1957年にラテン文字を基本として中国政府が作ったものだという（参考文献C 2001.）。彼らはかつてチベット高原から怒江流域へ移住した民族であり、もともとは碧羅雪山と高黎貢山の1,500メートル以上の原始林地帯に住んで、狩猟や山菜・茸・果物の採取をして暮らしていたこと。狩猟の対象とした動物は「野鴿・斑鳩・野鷄・雉鷄・錦鷄・雪鷄……」などの鳥類や、「海狸・竹鼠・野兔・狐狸・野猪・猴子・老熊・鹿子・老虎・野牛……」などの獣類だったという。山に生きる彼らの暮らしの中で育まれた信仰がトーテム信仰であり、山の神信仰であった。特に狩猟生活から山の神信仰との深い関連が生れたこと、などであった。狩猟と山の神信仰とのつながりという点では日本の場合と似ている。

彼らの伝統的狩猟用具は、アーチェリーに似た弓で、矢を真っ直ぐ飛ばすためにガイドの木に溝がついた木製の〈弩〉である。〈弩〉は、長さ1メートル程度だから藪の茂みの中



写真③ 史富相氏（右）の発表

でも使用できる猟具である。発射装置もあり、竹ヒゴのような矢は割と正確に獲物を狙えるようだった。これも今では競技に用いる他は六庫の町の土産物屋で矢を入れた野性の獣皮の矢入れ（箆）と共に売られている。夜の土産物屋の主人に実際に矢を飛ばしてほしいと頼むと、怒江の川岸から流れの中ほどに向かって射て見せた。彼は、これで私も昔は木の上の鳥や獣を沢山捕ったものだ、と得意満面の様子だった。矢は結構良く飛ぶ。怒江の岸から土産物屋の主人が射た矢は、昔の思い出とともに暗闇の中へ消えて行った。



写真④ リス族狩猟用の弩

トーテム信仰については、リス族の各集団は動物や植物のトーテムを有し、熊や虎や鼠の一族であるとか、竹や木や魚の一族であるという形で彼らの起源を信じてきたという。ちなみに発表者である史富相氏の一族のトーテムは木であり、節日（祭日）には木の下で祭りをしたという。その話に現地人の発表ならではの真実味を感じた。〈木〉氏族の樹木崇拜に関する氏の発表によれば、大晦日の夜、各家ごとに松の木を一本ずつ伐ってきて屋内に挿し立て、これを「黒悶忍」と称し、一家全員が集まって酒の用意をしたのち、家長が祭詞（祝詞）を唱え、清めのような儀式を行ない、「黒悶忍」の松に豚の頭と餅を掛けるという。3日後には、これを各戸から村全体の神聖な樹木のもとに運び、村中の人々が集うなかで村の信望ある長老が祭祀儀礼を取り行なう。長老は、その聖樹の下で木氏の祖先が怒江大峡谷へ移住してきた過程を語る祭詞を口誦し、聖樹が氏族の人々に幸福と繁栄、また健康と長寿をもたらすよう祈祷の詞を述べる。それが終わると各戸の「黒悶忍」は聖樹の廻りに立てられ、供物は焼きはられる。

木氏族のトーテム信仰儀礼の概略はこのようなものであった。しかし現在怒江流域では至る所にカトリック教会を目にする。州政府宗教局の人から聞いた話によれば、リス族のキリスト教信者は現在8万5千人もいるという。六庫の南、新建村というリス族の村（ちなみにここは太平洋戦争中、日本軍によって多くの住民が殺された村だという）で、我々を歓迎するために開かれた「民族民間文芸晩会」の舞台で村人が歌った歌は、なんと賛美歌「きよしこの夜」であり、スコットランド民謡「蛍の光」の混声合唱だった。これは伝統的な民族文化に触れることを目的に旅していた我々には予期しない驚きだった。史富相氏が発表したトーテム信仰はキリスト教の布教とともに次第に消滅していった。1930年代、福貢地方の村にキリスト教が入ると村人全員が信者となり、かくしてトーテム崇拜は禁じられ、村の聖樹だった「大秃杉」は伐り倒されて建材となった。また、年3回行なわれていた祭の日は、キリスト教の感恩節、復活節、聖誕節に取って代わられたという。リス族には、トーテム信仰に伴う多くの神話があり、創世神話や洪水神話、動植物や自然現象にまつわる神話も多くあるとの発表だったが、今や彼らの精神世界も決して昔のままではない。とりわけ中華人民共和国成立後、生活環境も大きく変化した。狩猟・採集生活の時代があったというが、現在ではかなり低地に住み、稲やトウモロコシの穀物栽培、牛や鶏の家畜の飼育による生活をしている。史富相氏が発表の参考にした資料も「碧江県志」などの文献資料であった。怒族の農業について後述するように、1950年代から60年代にかけてはリス族の生産活動（農業）にも大きな変化が起きたらしい。



写真⑤ リス族民家の中庭で

8月20日、瀘水県新建村を訪問し、民家の庭で夕食の饗応を受けた。101歳の老婆を頂点に15人家族だという。写真⑤に見える左の鍋は「包谷稀飯（パオクーシーファン）」すなわちトウモロコシ粥である。

水稻栽培も行なわれているが、圧倒的に多かったのは山の斜面をおおっているトウモロコシ畑だった。生産力はあまり高くないようだし、日本人が今スーパーで買う柔らかくて甘いトウモロコシではない。



写真⑥ おめかしして出迎えた村の子どもたち
(新建村で)

[怒江の自然と文化]

怒江は、その上流をチベット高原に発し、福貢の辺りでは標高5千メートル以上の高黎貢山と碧羅雪山（4,435m）の間を深く抉るようにして流れくんだり、下流はミャンマーのサルウィン川となる大河である。8月は雨期の最中で、六庫付近の速い濁流は信濃川下流の大洪水のようであった。上流に至るほど流れは急で、まさに「一瀉千里」の成語そのものであり、怒江という名のとおおり、あたかも怒れるごとく水が逆巻き、六庫から貢山までの間は大河ながら船の航行は不可能と感じられた。雲南北西部には、この怒江と並行して、同じくチベット高原から流れ出る大河が二流ある。瀾滄江と金沙江で、これら三つの川がこの地方をほぼ並行して流れていることから「三江并流」の地と呼ばれ、いずれも兩岸数千メートル以上の山が聳える大峡谷を形成して独特の自然景観を呈していることから、現在世界自然遺産の指定を受けている地域である。瀾滄江は南に下ってメコン川となり、金沙江は東に流れて中国最大の大河である長江となる。



写真⑦ 怒江 上流の福貢方面を望む
(写真左側の山裾に福貢方面へ至る公道が走る)

なお、この川には急流の中で進化したような頭の平らな小魚が棲息していて地元の食用となっていた。日本で言えば鰻（かじか）といったところだが、名前は失念してしまった。空揚げを食べてみたが、口の奢った日本人にはトウモロコシと同じく特に美味しいものではなかった。沿道では2本の竹竿

に網を張った簡単な仕掛けを持って歩いている男たちをよく見かけた。川で漁をするためのものだろう。

かつてこの地一帯は焼畑が行なわれていたが、今は自然環境の保護政策によって禁じられている。峡谷は傾斜が急で土砂が崩れやすく、雨期の怒江は濃い濁流の状態が続く。



写真⑧ 雨によって急斜面から流れ下る土砂

兩岸の耕作可能な傾斜地は山頂まで畑に耕されているが、土地そのものが痩せているらしく、トウモロコシの葉も緑が薄かった。



写真⑨ 山の中腹に拓けた耕作地と民家
(六庫から福貢へ至る途中で)

峡谷には平地がほとんど無く、民家はみな山の傾斜地に建てられていて、片側の土台を崖下から高く立てた幾本かの支柱で支える構造となっている。また床や壁に、編んだ竹材を



写真⑩ 六庫の市場で売られていた大根
(長さが短く山の畑で収穫されたものと思われる)

使用している家屋もある。

怒江では、トウモロコシから「パオクー酒」という地酒も造っている。アルコール度は低く、少し酸味のある酒だった。盃は4～5cm程の太さの竹で、節の部分を、ちょうど日本の小さな盃ほどに切り轆轤で削った容器である。客を歓迎するとき、この酒で同心酒を飲む。すなわち二人で頬を近づけてその小さな盃から同時に酒を吸るのである。私も若い娘さんから誘われたがそれは断り、もう一つの間接的な方法、つまりお互いの腕を交差させて自分の手でそれぞれの盃から飲む同心酒をさせてもらった。福貢でリス族風料理を食べたときのことである。そこは椅子をはじめ柱を除く壁や床をすべて竹材で造ったレストランであった。

リス族風料理では米飯は箸を使わず手で食べるのだという。この風習は箸を使う漢族の風習とは異なっていて、稲作が東南アジア方面から比較的新しい時代に入ったことを示しているように思われた。

また、客を歓迎するとき酒をすすめるのはこの地方だけではないが、彼らには「勸酒歌」があり、これを歌いながら客人に酒を勧めるのである。この地の人々はよく歌うだけでなく、よく踊る。踊りに音楽は付きものであり、音楽はまた多く楽器を伴う。歓迎の踊りでは、手作りの笛・口弦(口琴)・琵琶が用いられていた。



写真⑪ 怒江の民族楽器「琵琶」

(怒族にも達比亞(ダービヤ)と呼ばれる類似の琵琶がある)

[怒族]

大峡谷を流れる川の名は現在「怒江」と呼ばれ、まさにこの民族の名で呼ばれているが、しかし怒族の人口はリス族の一割程度に過ぎず、しかもいっそう自然条件が厳しい高地の山腹に暮らしているという。以下、文献によって怒族の農業を概観すると次のようになる。

怒族の土地利用は、水田、段々畑、牛犁地(役牛を使って耕せる土地)、手掘地(手で耕す土地)、輪歇地(焼畑と休耕を繰り返す土地)、火山地に分けられる。

○水田 多くは1957年の水利建設時期に開墾されたものである。

○段々畑 50年代に水田とした所のうち水不足によって畑作地に変えられた土地であり、さらにまた60年代に毛沢東が掲げた「農業は大衆に学べ」のスローガンによる農業

改革により、傾斜地に石を積み上げて造成した土地である。

○牛犁地 おもに山の中腹や怒江近くの緩やかな台地上で傾斜角度30度以下の地に分布し、玉米（トウモロコシ）などの畑作物の生産地となっている。

○手掘地 土が深く肥沃な場所だが、急傾斜地であったり石だらけの土地で、傾斜角は45度前後に達する所である。

○輪歇地（休閒地） 雑木林と畑地を交互に繰り返す土地である。冬瓜を選んだり（不明）、櫟樹（クヌギ）などの広葉落葉樹林で成長の速い木が生えていて、土が少し深くかつ湿潤で肥沃な林を、冬・春の時節に伐り倒し、焼き尽くしたところに作物の種を播く。腐葉土と灰で2～3年は畑として利用できるが、地力回復のためにはまた5～6年樹木を生やさなければならない。その後、また焼畑をする。それも何度か繰り返すと雑木はほとんど生えなくなり、ヨモギ原となるのでヨモギと畑作物の輪作ようになる。漆が比較的多いところでは漆と畑作の輪作をしている。

なお、上記の土地で栽培される作物のほとんどが春のみ耕作播種する春作物で、水田も一期作である（ただし村近くで施肥や管理がしやすい所では二期作も行なわれている）。おもな作物はトウモロコシ、水稻、ソバ、天雄米（不明）、小麦、その他芋類や豆類で、とくにトウモロコシが主作物となっている。貢山地方ではこのほかにハダカムギ、ヒエ、小紅粟、コーリャンなどを栽培している。

家畜類については、地形から分かるように開放以前は飼っていなかったが、その後は豚、牛、山羊、狗、鶏などを飼育するようになった。

また、養蜂が盛んで、各戸の重要な副業となっている。

（以上、参考文献Aによる）

怒族の住む地域として今回訪れることができたのは、六庫と福貢の間にある知子羅と怒江州最北端の丙中洛であった。

六庫から怒江上流方面にしばらく行くと、道の山側に「碧江旧城景区」と書かれた石碑が建っている。そこから左岸の山の尾根へのぼる車道があって、登り詰めた集落には小学校があり、また展望台があった。標高1,800m程にある台地が知子羅で、旧碧江県都跡である。怒江右岸に聳える高黎貢山の山並みが展望できる見晴らしの良いところだった。



写真⑬ 旧碧江県都の展望台から見た下界の風景
（怒江は遥か下方にあり、山腹が怒族たちの生活の場である）

雨期だったので、山腹には水田があり、溝には水が流れていたが、冬の乾期に水が潤れたときの生活用水はどうするのだろうかと思った。



写真⑭ 怒族の子どもたち
（知子羅の小学校校庭で）

[丙中洛]

怒江州の最北端は貢山独竜族怒族自治県で、貢山という町がその中心である。貢山からさらに怒江の上流をめざして進むと、車道はそのうち舗装が途切れて砂利道となる。次第に狭まる峡谷を一時間ほど走ると、急に広々とした光景が目の前に開ける。なだらかな山裾に広がる畑と水田、その緑の中に小さな町並みが横たわり、廻りの山々には白い雲が流れている。断崖にへばり付くように走ってきたマイクロバスの車窓の前に忽然と現れるその風景には誰しも目を奪われるだろう。そこはまさしく山奥の川を遡って行き着くことがあるという伝説の桃源郷にふさわしかった。チベット族・怒族たちが住む丙中洛という名の地域である。



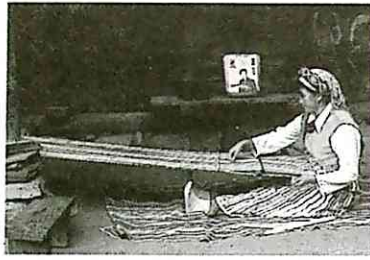
写真⑮ 丙中洛の風景

（麗江北部に香格里拉＝シャングリラと称する地があって桃源郷の代名詞となっているが、ここにも「中国香格里拉・丙中洛」の文字が刻まれた石碑が建てられている）

8月22日の昼近く、ここでもまた我々は酒と勸酒歌の歓迎を受けて時を忘れたかのごとき丙中洛の町へ入った。自動車の通れる公道はここまでで、それから先は工事中和のことである。チベットまではあと36キロメートルと近い。チベット族が多かったのうなづけた。



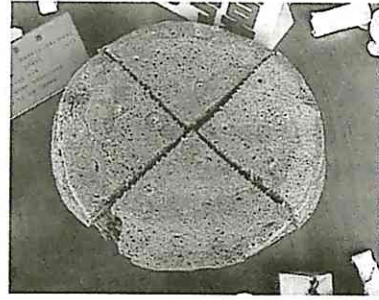
写真⑮



写真⑯

機織りする怒族の女性

(素朴ないわゆる居坐機(イザリバタ)である)



写真⑰ 怒族の石板粑粑

次はその日の歓迎会で食べた昼食メニューである。

菜 譜

- ①木秋燉鶏……とろ火で煮込んだ鶏スープ(木秋は不明)
- ②煮洋芋(文化烧烤)……ゆでたジャガイモ
- ③雑鍋菜
- ④燉牛頭蹄……牛肉のスープ
- ⑤炒南瓜尖……カボチャの炒め物
- ⑥炒芋頭……里芋の炒め物
- ⑦怒族石板粑粑……石板の上で焼いた餅
- ⑧水果……フルーツ

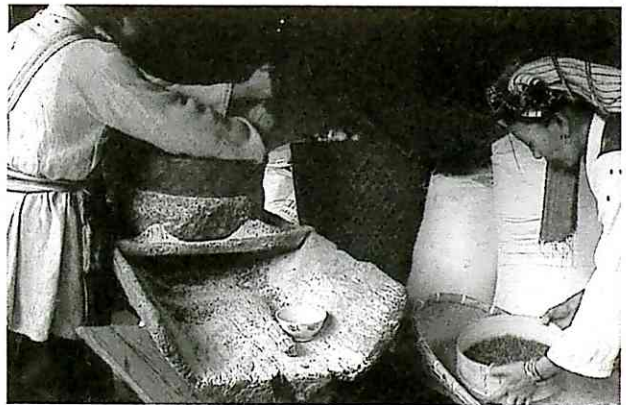
主食：包谷稀飯(怒族風味) 大米飯……白米のご飯

附加：牛奶 鹵腐 千煽青辣椒

……牛奶は牛乳、鹵腐は豆腐に調味料を混ぜた辛い発酵食品、千煽青辣椒は緑のトウガラシの炒め物。



写真⑱ 臼と杵を使ったソバ粉の製粉作業



写真⑲ 石臼によるソバ粉挽き

①～⑧のご馳走の主な食材は肉類が鶏と牛、野菜類がジャガイモ・里芋・カボチャその他キノコや葉物である。ただし⑦はちょっと変わった食べ物。「粑粑」は餅の意味であるが、我々のいう餅ではなかった。この地方の地層からは、平らに剥ぎ取れる板状の岩石が多く産出されるため、民家の屋根瓦に利用されている。メニューの石板とはその石のことと思われ、五徳を据えた囲炉裏の火の上にこの石板を置き、熱く熱したその上で、水で練ったソバ粉を円盤状に焼き上げる。少し堅めのソバ饅頭であり、蒸しパンのようなものである。砂糖味も塩味もないソバ粉だけのものだからそう簡単には喉を通らない。懐かしいソバの味ではあったが、何か水分と一緒に流し込む必要のある食べ物だった。メニューでわざわざ「怒族の」と断っているように、これは古くからの怒族の伝統的な食べ物であろう。(付言すれば、リス族にはソバをテーマとする蕎麦氏族もいて、その氏族の祖先は始祖の女性がソバを食べたとき妊娠して生まれた子どもだという。参考文献D 1993.)

前掲メニューの中で「主食」となっているのは「怒族風味」と説明される「包谷稀飯(パオクーシーファン)」と白米ご飯である。水田の少なさからすれば、ここでもやはり主食は「包谷稀飯」すなわちトウモロコシ粥である。理想郷と呼ばれるこの地も、我々日本人の物質的な生活の豊かさから見れば貧しいところである。今ではここまで自動車の通れる道が

できて外部との交通が容易になり、また中央政府の改革開放政策によって、我々のような外国からの観光客も訪れるようになったし、大きなバラボラアンテナからは大都会の情報が直接届くようになった。人々はそれによって今まで自分たちの自給自足の生活に欠けているものを意識するようになるだろう。地域間の経済格差が拡大する中で、現在政府がとっている方針は、この地の民族文化と自然景観を観光資源ととらえ、内外から多くの観光客を呼び込むことで地域経済の活性化を図ろうというものである。まもなくこの地からさらに奥地のチベット自治区に向かって公道が通じるという。それによってますます外部との接触が頻繁になるだろう。

今はまだここには厳しい自然の中で山を神と崇め、歌うこと踊ることが好きな醇朴な人々の暮らしがある。もちろん、その生活が今まで千古不易のものだったわけではない。雲南は全体的に食用植物の宝庫だと言われるけれども、前掲メニューの中の主要な食材は外来のものである。ジャガイモもト

ウモロコシもカボチャも牛も元来この地のものではない。貢山に至る沿道の小さな空き地の所々に、紫がかった大きな葉の、食用カンナと思われる栽培植物もよく見かけた。比較的古くからあったと思われる腹の足しになる食べ物としては郷土食的な⑦のソバ餅ぐらいだろう。貢山での夕食には皮を剥いたソバの実をゆでただけの「ソバご飯」も出た。メニューに見られる外来の食べ物は文化伝播によってこの地に入ったものとも考えられるが、とりわけ中華人民共和国の成立以後、この地に及んだ農業改革によるところが大きいと思われる。



写真⑩ 怒族の若い女性
(貢山での夕食の席で給仕してくれた娘さん)

なお、独竜族が住む地域には貢山に戻って丙中洛とは別の道を行かなければならないが、今回の旅行では行けなかった。そこへ至る独竜江公路は90年代後半に完成したばかりである。

参考文献：

- A 郭浄・段玉明・楊福泉主編『雲南少数民族概覧』1999. 雲南人民出版社刊
- B 首届怒江大峡谷民族文化学术研讨会组委会編『首届怒江大峡谷民族文化学术研讨会论文集』2004.08
- C 東京堂出版刊『中国少数民族事典』2001.
- D 覃光広他編著・林雅子訳『中国少数民族の信仰と習俗』1993. 第一書房刊